

白山ふるさと文学賞

第十一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 小説の部 優秀賞

「永遠の二カ月」

美川中学校一年 坂尾 玲奈

「美夜！美夜！」

嗚咽混じりの私を呼ぶ声。鳴り響く機械音。私が意識をとり戻したのは朝の訪れを感じさせない、深い夜だった。

「意識を戻しましたよ！名前言えますか？」

「詩瀨美夜です。」

ほっとした様子で私の手をにぎった母の目には、涙があふれていた。しばらくして朝の光がさしてきた頃、重たい表情をした医師が口を開いた。

「詩瀨さん、落ち着いて聞いてください。」

「はい・・・なんででしょうか。」

「あなたは、学校の教室で倒れて此処までやって来ました。あなたの命は、もう永くないのです。」

その言葉に、母はもう一度体を震わせ泣き崩れるのであった。本人である私は目は乾くばかりで、涙とはかけ離れていた。

「生きられても・・・最悪二カ月程度と診断されました。」

二ヶ月。具体的な数字が、私を混乱の渦へと誘う。涙など出るはずも無く。私が黙っているせいか、病室には母親の泣き声と、機械音だけが響き渡っていた。

私、詩瀨美夜は中学二年生。生まれてすぐに治療法がないとされる難病が見つかった。しかし、たまに発症する程度で普通の中学生と変わらない生活を送っていた。

今日も、たくさんの声が混じってさわがしい玄関口で、大切な人を待っていた。聞き覚えのある声がある方へ、私は引きつけられるように歩いて行ったのだった。

「美夜ああ！昨日・・・大丈夫だったの!？」

「私・・・もう帰って来ないのかと思った。」

私が、たまに発症して倒れたり、早退したりすると、いつも二人は大

げさな程に私を心配するのであった。いつもなら、「こんなの普通だよ。」と笑い合えるのだったが、昨日医師に言われた事はどれも非現実的であろう。此処で言ってしまうと二人がどんな反応でも、周りに迷惑がかかってしまうと思った。そんな大切な二人に、厳しい視線など向けさせたくなかった。

「ちよっと、話があるんだ。いつもの場所に朝礼の後来てもらえる？」二人は口をそろえて「わかった。」と言った。

私たちの言ういつもの場所、とは花は枯れもう誰も使っていない、小さな中庭のことであった。そこには二人の親友、坂井華麗と、金森紗楽が居る。二人は中学生に入って急激に仲良くなった大切な親友。

「落ち着いて、驚かないで聞いてね・・・。」

改まって話す私を二人は険しい表情で見つめている。

「昨日私倒れたでしょ。で、お医者さんからさ・・・。」

そこまで言いかけて止めた。いつも察しが良い華麗はもうこの不穏な雰囲気になんかを感じたような表情をしていた。

「私、あと二カ月程度しか生きられないって言われたんだ・・・！」

受け入れられない現実を口に出したその途端に、今まで乾いていた目が急に湿り出した。雨のように弱い涙が垂れたのだった。

「うっ・・・ううんっ・・・。」

元々、感受性が豊かな紗楽も一緒に泣き出した。華麗は何を言っているかわからないような表情でうつぶわいていた。いつも孤独な中庭に二人の泣き声が響くばかりで、鳥の声も学校の声もはね返していった。しばらくして、涙の大波が引いた、チャイムが鳴る一分前。最初に沈黙を破ったのは華麗だった。

「じゃあ、二カ月間、美夜の幸せをお手伝いさせて。」

普段クールであり感情を見せない華麗が言ってくれる台詞は、初めての温かさだった。

「私もそうする。どうせ死んじゃうんだったら、美夜の後悔がないよ

うにしたいから。」

紗楽も続けた。まだ、涙声だった。

「二人共・・・本当に有難う。」

私の返事を待つてくれたかのように、チャイムが鳴った。

昼休みの時間。幸い、昨日の後遺症は残っていないかった。二人がいつもの表情に戻り、私の机へやってきた。紗楽が私に一枚の紙を差し出した。

「美夜、これ書いてー華麗と作ったの。」

その紙には『美夜のやりたいことリスト』と題し、二人の思いが描かれていた。

「ここにやりたいこと何でも書いてー私達で、できることなら叶えるから。」

「思い出いっぱい作ろうね。」

私は早速書き出した。書く、止まらなかつた。私ってこんなにやりたいことがいっぱいあるんだな、と感ずることができた。

「はいっ、私がやりたいこと！」

『好きな服を着て、三人でカラオケに行きたい』

『私の家でお泊まり会をしたい』

『好きな人に思いを伝えたい』

・・・他いっぱい。全てこの年で、死ぬ迄にやりたいこと。

「美夜らしい、良い願いだね。」

「私達の名前がいっぱい入ってて嬉しい！」

二カ月といつても、その間に発症するかもしれない。二カ月もたずに死ぬかもしれない。そんな不安と戦いながら私は二カ月を過ごすことを決めた。ここから始まる二カ月の物語。

「私達なら、全部叶えてあげられるよね。」

「うん、絶対！」

「私・・・二カ月絶対楽しく過ごすから！」

入学した時がよみがえってきたようだ。わずかな痛みを打ち消すような二人の笑顔が頼りだった。やっぱ私達に涙は似合わない。

「よっしゃ、一つめの願い。放課後カラオケ行っちゃおう？」

「おっしゃるぞー！」

私達は放課後の楽しみに向かって走り抜けた。

あれから二週間が過ぎた。私達は一日一個のペースで願いを叶えていった。『美夜のやりたいことリスト』にチェックが増えていくのが嬉しかった。チェックがづくことで次第に心が満たされていった。

しかし体調が優れず、発症する頻度が日に日に増えていった。身体は心に追いつけていない。でもまだ、やりたいことはいっぱい残っている。

「美夜、体調大丈夫？・・・まだやりたいことリスト、全部叶えてないでしょ。まだ一カ月もあるんだよ！」

「うん、今日は大丈夫。入院する程じゃないから。」

嘘だ。本当は入院を迫られている。私は心の無い作り笑顔を紗楽に向け、虚言を吐くのであった。自分は元気だと、言い聞かせて。

「あつ、まだお泊まり会のところチェックできてないじゃん。来週、家に泊まりに来なよ。」

私は思い出作りに必死で、身体の事を何も気にかけていない。まるで死を受け入れるかのように。このやりたいことリストが全て叶ったら、私の生きる意味は病氣と戦うことぐらいしか無いのだろうか。生きたい、とはつきり言えない自分が悔しい。

「美夜・・・無理してない？」

「やっぱ、華麗にはお見通しなのに。」

「ううん、大丈夫！それよりお泊まり会の時・・・」

今の私には死を感じさせないように振る舞うことしかできなかった。

弱音も吐かない。普通の中学生と何一つ変わらない。この私の笑顔が消えてしまわないように。せめて消えてしまふまでは、明るくいたい。

時は進み、余命宣告を受けた日から一月と、三週間が経った午前二時。

聞き覚えのある機械音と、嗚咽混じりの名前を呼ぶ声がこだまするいつもの病室。

「意識を戻しました！名前は言えますか？」

「・・・詩瀬美夜です。」

約二カ月前と変わらない一連の流れ。違うところを言うならば、窓の外はこの沈鬱な空気とは裏腹に、朝の新しい日差しに照らされてる事。辺りを見回すと、涙を流す紗楽、眉間に皺を寄せ、うつむく華麗、そして私を呼ぶ母親。紗楽の手ににぎられた「やりたいことリスト」には、もうほぼ全てにチェックがついている。二カ月経つまで、残り一週間。

「私・・・また倒れたんだね。」

何度も発症して、何度も崩れ落ちて、余命宣告の正確さを実感するのである。医者は未来等見えない。占い師な訳でもない。だから、宣告された二カ月「より長く生きてもおかしくない」といった甘い考えを抱いていたりして。

「詩瀬さん、落ち着いて聞いてください。」

（またか）と言いつつさうになったのをこらえ、お先真つ暗な医師の言葉を持った。

「貴方は永くありません。今すぐ入院して、安静にしましょう。」

「嫌です！」

飲み込もうととしてのどにつつかえた反抗する言葉。思わず吐き出してしまうので、もう戻せない。医師の言う事は正しくて、私の体調を気遣って言うてくれたことだろう。だが、口から油をぬったかのよう

に、言葉を止めることが出来ない。私はその後も続けてしまった。

「どうして私だけ、普通の中学生みたいに青春を送れないんですか。どうして毎日死と直面していなくちゃならないんですか。死ぬまで・・・普通の生活を送っていたいよ。」

ずっとためこんだ言葉。現実と同じように受け流していた言葉。今なにかに当たる様に吐き出した言葉。さらに私は続ける。

「私、なにか悪いことしましたか。」

これが私の切実な問い。ここで私は言葉を止めた。苦しくなるだけだから。吐く息が熱い。

「ごめんさい。」

虚しくなって謝ったのもつかの間。今は受け入れ難い現実を抱き寄せ、涙となって身体から出ていく。

しばらく続いた沈黙をといたのは紗楽だった。

「私のせいだ・・・。」

「何言ってるの・・・。」

「私がやりたいことリストとか提案して、美夜に無理させたから。私が動かしたから・・・。」

「美夜の前でそんなこと言わないでよ！」

「でも・・・。」

「貴方のせいなんかじゃないから。お願いだから目を覚ましてよ・・・。」このせまい病室に、椅子を荒々しく引く音が響く。紗楽は出ていった。華麗も後を追う。これはリアルな悪夢？紗楽に背負わせるなど親友として許されない。私が死んだら、華麗迄にも背負わせる事になるかもしれない。全ての大もとは私なのになんだかやるせない気持ちになつてしまった。そして辺りを見渡すと、孤独。この誰もいない病室が、わずかな痛みが残る私の胸に、追い討ちをかけるかのように重くのしかかる。

「なにしてんだか・・・。」

あれから一夜明け、やってきた夜。今日の夜空は余命宣告を受けたあの日と同じ、朝の訪れを感じさせないような深い、夜。見渡す限り、空には何も無い。星も、希望もない。あの日から二カ月経つ迄、残り五日。身体は思い通りにしてくれない。余命通りに動いていない気がした。やりたいことリストには、一つだけチェックが付いていない願いがあつた。私はぼんやりと病室の白い天井をながめ、美しい朝を待っていた。

気付いたら眠っていたのだつた。窓の外には、雨垂れの打つ音。黒い雲。ごまかしようのない、暗い雲空。誰もいない。昨日の胸の痛みも、重たい頭も、目が乾く感覚も変わらない。私にとって当たり前の日常、なはず。でもそれが当たり前になつていくという現実が何処か虚しく思えた。

何気なくフロアを降りた。今日のオフィスはさわがしく、せわしい雰囲気包まれていた。一体何があつたのだろう。急患だろうか。朝食を食べるベンチへと向かつた。毎日一人で食べる朝食。慣れきつたアングル。

「相席良いですか。」

皺々の手と、白い毛が混じつた髪。錆びた車椅子に、かすれた声。その人は、おとなりの病床の史郎さん、というおじいさんだつた。

「もちろんです。」

しばらく沈黙が続くベンチ。黙々と朝食を食べる、史郎さんと私。

「何時も大変そうだね。急に発作が出たと思うと、カーテンの奥から泣き声が聞こえてくる。」

おとなりの史郎さんだからこそ、わかる話。

「あつーうるさくてすみません……。睡眠の邪魔になつたかと。」

「いやいや、あの涙は貴重な涙だぞ。君のために、君を必要としていくから流した涙なんだからね。うるさいとなんて思わんよ。」

この人なら、今の気持ちを話してみてもいいのかも。心の鍵を開けたくなつた。

「あの……。実は私、難病で治す方法が見つからない病気の重度の患者なんです。」

「ほう……。」

「で私、残り五日ぐらいしか寿命が無いと医師に言われたんです。」私は紗楽や華麗にも話したことがない気持ちを打ち明けた。五日という数字の不安、あるはずもないきせきを願う気持ち。そして、親友や母を残して去る心の重さ。全てをぶつけた。

「若いつて良いなあ。」

一通り話し終わつて初めて放つた一言は、其れだつた。最初は真意がよく解らなかつた。

「若くないと死ぬことをそんなに不安に思わないだろうか？」

「そうかも……。しれませんが……。」

史郎さんも、病氣と戦つている。そして、年老いている。史郎さんはいつ死んでもいいのだろうか。

「ところで、君は何の病氣なの。」

「……。症です。」

「えっ君、聞いてないのかい？」

「何がですか。」

「君のその病氣、昨日手術方法が科学省にて発表されたんだよ。」

一瞬で訪れた希望に消えた表情、頭は思考停止。一旦止まつて、また始まつた。

「本当ですかああ!!」

ベンチの周囲に響き渡る声を聞いて我に返る。そしてせきをする。のどがうる。

「落ち着くんだ……。聞いてなかつたんだね。」

「そうなんです……。私、生きられるかもしれないね……。!」

「それは、医者に聞いてみると良い。わしにはわからん。」

朝食が入っていたお皿に反射した自分の顔の目は、光の面積が増えた気がする。

「今すぐ、お医者さんに聞きに行きます！」

「おう、君の幸運をいのつていますよ。」

「はい！ありがとうございます！」

「いいえ。そして、走らないように。発症したら大変だからね。」

「はい！」

足に自然とはずみがかかる。

「私、手術受けます！」

自分の病床で医師と一対一。私は駄々をこねる子供のように意見を曲げない。

「美夜さん、手術に必要なキットは確保しました。ですが、命の危険も手術には付きものなんです。医師側も初めてする手術です。失敗の確率も、通常よりは高まるでしょう。」

何でも良い。五日以上生きられるならそれで幸せ。やらないで後悔するよりやって後悔する方が良いとどこかで聞いたことがあった。

「いいです。約束します。」

「じゃあ、明日の朝、診察室へお願いします。」

「はい。」

今の返事が覚悟を決める言葉だった。

私が目を開けたのは星が点滅した灰色の空が目立つ夜。朝が待っているよ、と言っているような空だ。美しい。

「目を覚ましましたよー！」

何時もの病室。しかし何時もと違ったのは、孤独じゃないこと。人が居ること。

「体調はどうですか？」

そして、名前を聞かれないこと。また、後遺症の残らない身体。……元気です。」

そう答えられる事だけでもうれしいんだ。

「成功だよ!!」

紗楽と華麗は抱き合っている。母は、手をにぎっている。カーテンの向こうには史郎さんが穏やかな笑みを浮かべている。

とつぜん迎える成功に、心が落ち着かない。

「心配かけてごめん……。」

紗楽が自分を責めて、華麗が止めてケンカになったあの日から二人とは会っていないかった。

でも、今は分かち合える。

「美夜、生きてくれてありがとう。」

「紗楽……大げさだよお……。」

「もう生きるのを諦めたりしないで！」

「もちろんだよ、華麗。」

紗楽と華麗の一言が、今迄の思い出や苦悩をよみがえらせる。生きていだけで感謝されて、手術が成功したら、こんなに喜ばれるなんて、私は幸せ者だ。

「二人共、一つ言っている？」

「うん、何？」

「当たり前が当たり前じゃない人も居るから、感謝しないと駄目だよ。」

少し前から目線な言い方になってしまった、と言ってから思ったが、当たり前が当たり前じゃなかったからこそ言える台詞なんだと思う。私だからこそだ。

「わかつとるわい！」

そう言っって華麗は、手術したての私の身体を軽くたたいた。中学生が

友達同士でやる、この感じ。前までは、こう軽く触れるだけでもためらわれたのに。想定外のコミカルな返しに、想定外の笑いが起こる。

「ありがとう、ありがとう。」

これからは、一日一日を大切に生きたい。そして、当たり前前の価値を感じていきたい。当たり前前に浸かっていきたい。

そして、ポツケにくしゃくしゃになった、

「美夜のやりたいことリスト」を開く。

「えっ！最後のところチェックつけれるじゃん、全て叶うよ！」

「本当だあ！やったね！」

「みんなの、おかげだよ。」

そして少し名残惜しそうにチェックをつける。ギリギリの今になってチェックをつけた最後の願いとは、

『二月月より長く生きてやる！』
だった。

